

24. 防災の知恵を長く伝承するために

自然災害は、自然現象によるものではありませんが、同じ周期で同じようなことが発生するものではありません。自然現象自体が変化しますし、災害の対象も社会の状況や暮らし方で大きく変わります。したがって、自然災害は自然やコミュニティを基本とする社会のあり方と密接に関係することを考えると、これまで学習したことを見直すことで未来の暮らし方を示唆するものがあるのではないかと思います。これまで経験したことで得られたものをどのように次世代へ伝達していくのかは大変重要なことです。

先人は、経験した災害を風化させないことや安全なところを伝えるためにモニュメントや日記などに残したり、神社仏閣を建立したりしています。実際に、東日本大震災でも貞観地震(869年)以降に建立された神社の多くが被害から免れていますし、ある大規模な土石流災害時ではごく新しい家屋だけが被災したというような例もあります。これらは決して偶然ではなく、これまでの多くの犠牲の元で発現していることです。

防災は経験知やローカルな科学的知見、多面的な科学知見との総合から生まれてくるもので単なる場所や対象の特徴を網羅的に並べるということではないと思います。そこには、なぜそのような個別性や多様性が生まれたのか、生まれる可能性があるのか、いわば災害リスクについて、全体的な構造解析をしていく必要があると思います。そうすれば、災害についての理解が進んで自分なりの対応を考えることが出来るし、次世代へ継続して伝承されるような気がします。風化や腐食をさせないためには工夫しなければならないのだと思います。防災は、自然科学によってメカニズムを追究する近代科学的なアプローチだけでは及ばないものがあるようにいつも感じています。自然は複雑という言葉以上の世界であって、事後に理解はできてもそれが普遍的なものにならないことがあるかもしれません。

そして、先に述べた経験知ということからすると、民俗学的というか歴史学的というようなアプローチが大変重要な気がします。歴史や風土、宗教や自然信仰、文化やコミュニティ、生活習慣や祭祀等に注目していく事も大事で、近代科学的な数理的、科学的なものとの融合するというところからのアプローチも大事な着目点になるかもしれません。

いずれにしても、災害の体験は風化していきますが、それと平行して災害への関心を維持継続させるには、理解する努力や方法で日常化する必要があります。言い伝えがあっても、その背景を知らないと意味がありません。言い伝えられることの背景を理解していくことが大事で、どう伝えていくのか伝えられるのかを話し合うことこそが地域づくりの基本になるのではないかと思います。